

日本に影響を与えた中国の天文暦学者伝 (5)

游 藝

游藝の伝記について知られるところはきわめて少ない。彼の著書『天経或問』の序文の一つに1675年にあたる年が明記されていること、また同じく序文を寄せた掲喧(子宣)が20年来游藝の名を聞いていたが、会う機会もなく残念であったところ、康熙4年(1665)秋、閩(福建)に入って面談することができたと書いているから、17世紀なかばに福建で活動した人物であることが判明する。このように彼の経歴は明らかでないが、薦山先生すなわち宋代の游酢を祖としているといわれ(『天経或問』張昌亮序)、また彼には熊、熙、燕、照の4人の子があり(『天経或問後集』林雲銘序)、事実父の著書に長兄3人が注を付している。

游藝が熊明遇(良孺、司馬)と方以智(密之、1611~71)について学んだことは、『天経或問』本文で、それぞれ「余師司馬熊公」、「吾師良孺熊公」、「方密之老師」、「吾師密之」などと呼んでいることからわかる。ここで注目すべきは、彼がこれら二人の師から、明末清初に中国に来たイエズス会士がもたらした西洋科学知識の一端を吸収したらしいことである。熊明遇は熊三抜(S. de Ursis, 1575~1620)の『表度説』に序文を草しており、また自著『函字通』(別名『格致草』)にはイエズス会士系知識が散見される。また方以智は南京で畢方濟(F. Sambiasi, 1582~1649)に、また北京で湯若望(Adam Schall von Bell, 1591~1666)に会ったことが知られているし、彼の『物理小識』にも西洋科学知識が見出されるからである。

『天経或問』には実際イエズス会士系著作が活用されている。同書の引用書目(総計106点)には伝統的典籍と並んでこれの著作が見られるし、「西域天学家」として利瑪竇(M. Ricci, 1552~1610)ら入華耶蘇会士10名が挙げられている。また『天経或問』の本文の前には一連の図が付せられているが、そのうちには李之藻『渾蓋通憲図説』、湯若望『測食略』、陽瑪諾(E. Diaz, 1574~1659)『天問略』からの引用や図の転載が認められるのである。本書で紹介される西洋説は、一口でいうなら、アリストテレスの宇宙観、自然観である。宇宙体系としては基本的に、九重天、十二重天とよばれるアリストテレス流の同心球説であるが、周天円(小輪)、離心円(不同心圏)にも言及され、僅か一個所ではあるがティコの体系が触れられている。天上界と地上界(月下界)とを峻別するアリストテレス式二分法が踏襲されており、月下界を構成する四元素説(四元行)が説かれ、また種々の気象現象(雨、霧、露、雪、霰、雷電、虹)が説明さ

れている。

『天経或問』は不思議なことに本国の中国ではあまり注目されず、江戸時代のわが国においておおいに流布した。とりわけ享保15年(1730)西川正休によりその訓点本が出版されて以後、多くの読者を得るとともに、種々の注釈書も書かれ、普及したのであった。本書の舶載時期は判らないが、関流の和算家松永良弼、陰陽頭安倍(土御門)泰邦、久留米藩の入江修敬、金沢藩の天文学者西村遠里、安倍家の天文官小島好謙、天文方深川佑賢らが注釈書や解説書を著した。本書の記述は、儒者中村惕斎、僧文雄、僧円通、山形大貳、オランダ通詞本木良永、同志筑忠雄、司馬江漢、山片蟠桃などの天文関係書に参照され、また儒者赤井東海、三浦梅園、蘭学者山村才助、心学者石田梅岩、国学者本居宣長、大國隆正ら学派を問わず当時を代表する知識人の多くが参考としたのであった。この書がこのようにわが国で広範囲な読者を得るのに成功した訳は、次の3点にあると考えられる。

第一は、本書が暦算術に詳しくはなかったが、西洋天文学、とくに宇宙構造の概要を伝え、そのための恰好の入門書の役割を果たしたことである。しかも漢文で書かれていて、当時の知識人には簡単に読め、また専門的知識がなくとも西洋天文学説の新説(コペルニクス説には触れず)を知ることができたからであった。

第二は、この書の根底には宋学以来の気の哲学があり、これは宋学の気の自然哲学の深い影響下にあった当時の知識人に強くアピールしたに違いないからである。例えば、本書には一気の回転による宇宙生成説が図示されているが(昊天一氣渾淪变化図)、これは志筑忠雄の『曆象新書』「混沌分判図説」や河東田直正『昊天図説』に影響を与えている。先述の掲喧は游藝との対話の後「游子の書は一気これを運ずるのみ」と本書の性格を見抜いている。先の宇宙生成図は掲喧の『璇璣遺述』(一名『写天新語』)の同様の図の転載と考えられ、また游藝の統編ともいふべき『天経或問後集』には両者連名で同じような図が掲載されている。両者の思想的共通性が認められよう。

第三は、游藝が師方以智の唱えた形而下レベル(質測・器数)に留まらず、形而上レベル(通幾・中理)をも考究しなければならないという研究プログラムを引き継いでいたことである。すなわち天文学としての天学で終わらずに、理性の学としての天学をも遂行する必要を説いていたから、儒学という思想的枠組のなかで思索をしていた江戸の知識人にとっては抵抗感なしに受け入れることができたろう。それに西洋の学問は質測・器数レベルでは精しいが、通幾・中理レベルでは拙いという指摘は、西洋は形而下には強いが、形而上には弱いという新井白石以来のわが国の西洋学術観とよく合致していたことも挙げられよう。(吉田 忠)

平成元年10月20日	発行人	〒181 東京都三鷹市国立天文台内	社団法人 日本天文学会
印刷発行	印刷所	〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町565-12	啓文堂 松本印刷
定価464円(本体450円)	発行所	〒181 東京都三鷹市国立天文台内	社団法人 日本天文学会
	電話	(0422) 31-1359	振替口座 東京 6-13595